

社会が抱える優生思想

相模原市の知的障害者施設で起きた殺傷事件で、横浜地裁が16日、元職員植松聖被告に判決を言い渡す。検察側の求刑は死刑。事件を契機に小説「月」を執筆、死刑制度に長年、強く反対してきた作家で詩人の辺見庸さんに聞いた。

作家・詩人 辺見庸さん

この事件が起きた時、中世から近代、現代に至る人類の歴史の中で、非常に大きな出来事だと直感しました。「人間は平等であり、人権は守られる」「人を差別しても、されてもいいけない」といった言わすもがなの前提が私たちの内面できちんと破綻していたことを、あらわにしなければなりません。

相模原殺傷事件 16日判決



相模原障害者施設殺傷事件の判決公判を前に話す辺見庸さん

へんみ・よう 1944年宮城県生まれ。共同通信社で北京特派員、ハノイ支局長などを歴任し、日本新聞協会賞を受賞。「自動起床装置」で芥川賞、「もの喰う人びと」で講談社ノンフィクション賞、「眼(め)の海」で高見順賞、「増補版1★9★3★7」で城山三郎賞。

「この事件が起きた時、中世から近代、現代に至る人類の歴史の中で、非常に大きな出来事だと直感しました。」

「存在してもいい人間」と「存在してはいけない人間」を差別する。植松被告、私は「さ」と



殺傷事件が起きた知的障害者施設「津久井やまゆり園」 2016年、相模原市緑区

「被告と同じ論理」死刑には反対

「被告と同じ論理」死刑には反対。この事件が起きた時、中世から近代、現代に至る人類の歴史の中で、非常に大きな出来事だと直感しました。

都合の良いものだけに囲まれて生きていたい、「存在」を意識から消したい。一えたいの知れないそんな「本音」が、底知れない悪意の沼のように横たわる日本社会の基底に、相模原の事件は太い杖を打ち込むような出来事でした。

別役実さんを悼む

丸尾聡

40年ほど前、高校の図書館にある現代戯曲は、別役実戯曲集ばかりだった記憶がある。山形出身でわたしよりも上の世代の渡辺えりさんも同じことをおっしゃっていたから、別役さんが中学校時代を過ごされた長野市だからというわけではなく、日本全国である時代そんな感じだったのだと思う。

「日本の不条理劇を切り開いた」「独特の作風」「エッセイ、童話も多く手掛けた」...。別役さんの死去を知らせるネットの情報はどれも正しい。しかし、どう書けばいいのだろうか。そう、もっと大きな、言ってみればつかんだと思つたら、吹き抜けていく風のような、そんな人で、そんな作品を書き続けた。

踏破されぬ「巨大な山脈」



別役実さん=2007年11月5日、東京都内

悲惨な体験も、言葉にして外へ投げ出されることによって消費されちゃう。沈黙して自分の内側のために積み重ねてきたものがなくなってきた。それは大きな問題だろうという感じがする。

5年ほど前、別役さんの話を聞いておかなきゃいけない、そんな思いで劇作家協会の会報誌「ト書き」で特集を組んだ。ご自宅で療養中の別役さんは、1

階のダイニングにベッドを運び込まれて生活していた。しかし、口から出る言葉は驚くほど論理的で知的で、ゆっくりとではあったがよみがえってきた。先の言葉は、東日本大震災の後、僕がこのことを書くとしたら10年先だろう、という別役さんの言葉を受け、震災被害の当事者がマインドを向けられ語らなければならぬことについて伺った問いへの返答。

幸い、浸か... 幸い、浸か... 幸い、浸か...

別役実さんは3日死去。82歳。